

## 基礎看護技術 学内実習の準備と片付けの現状と認識

大場みゆき・安富小織

The State of Preparations and Settlements to Practice the Basic Nursing Skills in Laboratory Practicum, and the Recognition of Teachers about the Present State in Nursing Schools.

OBA, Miyuki and YASUTOMI, Saori

### はじめに

学内実習は、基本的な技術の習得のほか看護者としての態度を学ぶ場として、基礎看護技術では特に重視されている。当校において、教員主体だった学内実習の準備と片付けを学生主体の方法に変えてみたところ、学生から実習に対して「積極的になれた、興味をもてた」等の声が聞かれるようになった。このことから準備、片付けは、学生の学習態度を育てる機会として重要ではないかと考えられた。本研究は、基礎看護実習における「準備・片付け」の位置付けを明らかにし、今後の学内実習の指導方法を検討する基礎資料とすることを目的としている。

### 研究方法

1. 調査期間 平成 13 年 5 月 2 日～5 月 29 日
2. 調査対象 全国の大学・短期大学・専門学校から無作為抽出した 115 校の基礎看護技術の学内実習担当者に回答を依頼した。
3. 調査方法 郵送法による質問紙調査
4. 調査内容 基礎看護技術の主な技術 3 項目（滅菌物の取り扱い、全身清拭、食事介助）の準備と片付けの現状と教員の意識、学内実習・自己学習での衛生材料と薬品の使用状況と教員の意識。  
\* 「準備、片付け」の捉え方を知るため、用語の定義はしなかった。
5. 分析方法 SPSS 10.0J を使用し、記述統計、クロス集計を行った。

## 結果

質問紙の回答は、69施設（回収率60%・有効回答率94%）、内訳は大学24（34.8%）、短大17（24.6%）、専門学校28（40.6%）であった。

1) 対象者特性および指導体制：教育経験年数は1～30年で平均8.9年。一校の教員数は1～14人で平均5.3人。1回の学内実習を受ける学生数は5～120人で平均54人、最頻値は40人と80人で各13校。一人の教員が指導する学生数は2～50人で平均12.4人。実習室のベッド数は3～32台で平均17台であった。

2) 主な技術の準備と片付けの現状： 主な基礎看護技術3項目（滅菌物の取り扱い、全身清拭、食事介助）を併せた合計の結果は、以下の通りであった。

準備・片付けの主体は「学生」が三分の二を占めていたが、学生が自分で棚から用意しているのは三分の一であった。準備内容としては、「学生が自分で棚から用意する」が多かったが、技術項目によって違いがみられた。また、テーブルに置かれた状態から用意することも「準備」としていた。

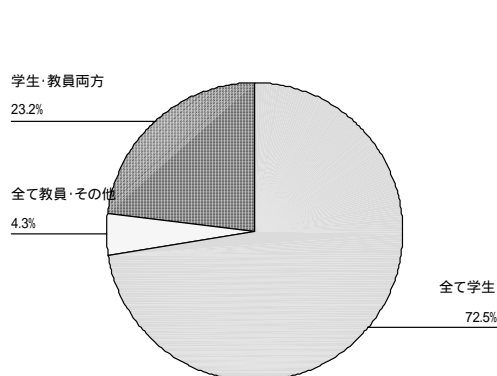


図1 準備/片付けの主体

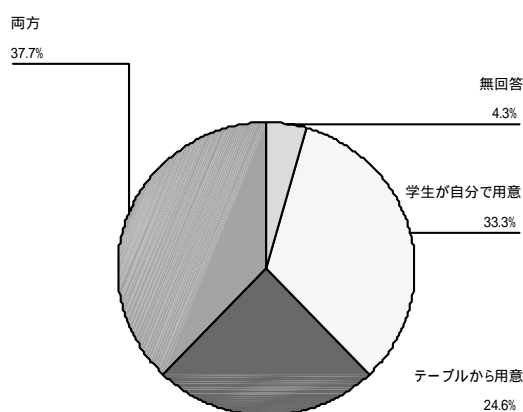


図2 準備の内容

片付け内容（表1）は、3項目ごとに違っているものの割合が最も多く（29%）、すべて「消毒」まで含めて行なっている施設は6校（8.7%）であった。さらに棚に戻している場合は、3項目とも棚に戻している場合が多かった。

指導方法（表2）をみると、準備・片付けのどちらも「直接・間接指導の両方」が最も多く、次に多いのが準備では「全て間接指導」で33.3%、片付けでは「全て直接指導」であった。

表1 技術3項目の片付け内容

内 容		度数(パーセント)
項目ごとに異なる		20 (29.0)
項目によって消毒又は棚		15 (21.7)
3項目 全て 同じ	棚に戻す	19 (27.5)
	テーブルに戻す	7 (10.1)
	消毒後に戻す	6 (8.7)
無回答		2 (2.9)
合 計		69 (100.0)

\* 内容：消毒、洗浄、収納（棚・テーブル）

表2 指導方法

内容	準備 (%)	片付け (%)
直接・間接指導 の両方	29 (42.0)	26 (37.7)
全て間接指導	23 (33.3)	16 (23.2)
全て直接指導	13 (18.3)	24 (34.8)
全て自主的	1 (1.4)	1 (1.4)
無回答	3 (4.3)	2 (2.9)
合計	69 (100.0)	69 (100.0)

\*

\*直接：その場に教員がいて一緒に行なう。

間接：口頭での説明、資料配布など。

図3・4は準備と片付けの時期を示している。準備を「全て実習中」にしている所は27.5%、片付けを「全て実習中」にしている所は26.1%であった。また、クロス集計した結果では、準備を「全て実習中」に行なっている場合は、片付けも「全て実習中」に行なう場合が多く、準備を「実習前」に行なっている場合は、片付けを「全て実習後」に行なっている場合が多かった。

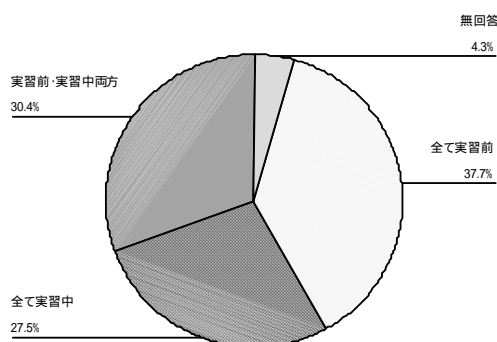


図3 準備の時期

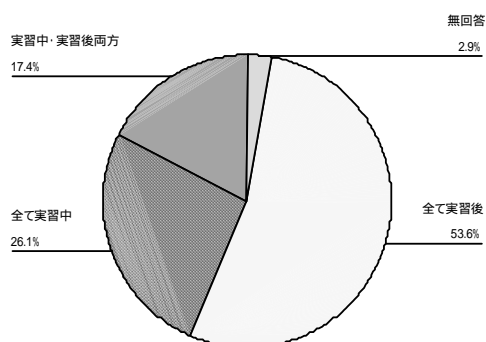


図4 片付けの時期

3) 教員の意識：学内実習の準備と片付けを担当教員がどのように考えているかを、「非常に思う」～「全く思わない」の5段階評定を用いて調査した。

技術教育への必要性を「非常に思う」と69.6%が、さらに看護基礎教育において重要なことと「非常に思う」と58.0%が回答していた。その一方で、「学内実習は『実施』が主体である」と「思う(非常に・やや)」が42.0%を占めていた。また、準備には物

品を点検することが含まれると「非常に思う」は 49.3%、片付けには消毒することを含むと「非常に思う」は 53.6%であった。

## 考察

### 1) 主な技術の準備と片付けの現状について

各学校での準備と片付けの内容には一貫性がみられたが、現状では『自分で作る』という準備から『テーブルに並んだ物を持ってくる』ことまでがすべて準備として一括りにされ、片付けについても同様であり、消毒しないで収納する事が含まれていた。つまり、基礎看護教育では「準備と片付け」の方法が統一されておらず、学習内容と技術習得にも影響していることが考えられる。

### 2) 教員の認識

「準備と片付け」について、教員の7割が技術教育における必要性を強く意識しながら、学内実習では「実施」と同様には位置付けられてはいない。この結果を主な技術3項目の現状と照らし合わせると、準備と片付けに対する必要性は認識されているが、実習内容は施設ごとに異なり、実際の学内実習のスタイルは「実施」を主体として行なわれている現状が窺えた。これには、教授内容の多さや指導にかかる時間的制約等が大きく関与していると思われる。さらに、教員が準備と片付けを学内実習の中でどのように意味付け、学生に何を学習させるのかの内容によって実習方法も違ってくる。準備と片付けの教育的意味が明らかにされていないため、個々の教員の認識が統一されず、それが方法の違いとして反映されたのではないかと推察される。

## おわりに

今回、準備と片付けの内容と教員の意識の関係性は明らかではなく、今後検討が必要である。さらに、学内実習の展開方法を学習内容と合わせて検討していくこと、またその教育的意味を学生に焦点をあてた調査研究によって検証していく作業が必要と考える。

平成14年3月末に出された「看護教育の在り方に関する検討会報告」は、看護技術の構成要素「実施と評価」において、「準備・片付け・後始末の各段階を基本的な法則に基づいて正確に実行する。」としている。実習に関わる教員が、準備、片付け（後始末）についての重要性を再認識し、学内実習での位置付けを明らかにしていくことが必要ではないだろうか。

(2003年3月20日 受理)